

2) レオナルド・フジタ展『小さな職人たち』からの報告

Study on Léonard Foujita exhibition. “The children are dressed as artisans”

池園歯科研究会 ○湯浅高行, 藤野瑠男
日本歯科大学 屋代正幸

Takayuki Yuasa, Yoshio Fujino, *Ikezono dental research group*
Masayuki Yashiro, *The Nippon Dental University*

フジタツグハルが初めてパリの地を踏んだのは1913年。困難にもめげず歯をくいしばり、彼は「乳白色の肌」の裸婦像で画家として栄冠を手に入れた。職人肌の画家フジタは、自分を育ててくれたこの町の底辺で手仕事にいそしむ人々に格別のいとおしさを感じていたことは想像に難くない。

戦後、新たにパリに住まうことになった晩年の1958年秋から、フジタはパリの街で様々な仕事に従事する子どもたちの姿を数多く描くようになる。どの作品も15cm四方のかわいらしい正方形のファイバーボード（木の繊維を合成樹脂で固めたもの）に油彩で描かれ、それぞれの絵にフランス語で職業名が書き込まれているのも特徴である。その翌年の春にかけて断続的に制作されたこれら一連の作品は『小さな職人たち』と呼ばれるように、左官や指物師、あるいは床屋といった、手仕事に携わるいわゆる職人系の人たちが重要な

テーマとなっている。

描かれている子どもたちはみな真剣に仕事に取り組んではいるものの、どこことなくぎこちなくユーモアがあり、フジタの空想による子どもならではの世界が展開されている。またそこには、パリそしてフランスに対するフジタの愛が凝縮されていると同時に、「作家はアルティスト（芸術家）である前に、アルティザン（職人）でなければならない」と語ったフジタという画家の、職人仕事に対する敬意がこめられているといえるようだ。

演者らは、この一連の小作品群の中に、「歯医者」というタイトルの絵があることに着目した。この絵は、フジタの眼で当時の歯科医院の一室を再現して、そこに歯の痛む子どもの患者と子どもの歯科医師が的確に描かれている。この絵を時代背景や社会状況を参考に考察しつつ、フジタの芸術の一端に触れてみたい。